

和田薫

KAORU WADA

喚起の時Ⅱ

20年の時を越えて

和田薫

KAORU WADA

喚起の時II

20年の時を越えて

和田さんとの出会い

デトロイト空港から車で40分走ったところにあるアンアーバーは大学の街。526haの広大な敷地を誇るミシガン州立大学があります。マイケル・ウード名教授（打楽器）が育てたパーカッション・アンサンブルと日本音楽集団との共演がロックハム会館で実現したのが、今から19年前の1988年3月3日。石井眞木、ジョン・ケージ、三木稔らの作品が並ぶ中、和田薫「楽市七座」には世界初演のマークが輝いていました。ミシガン・パーカッションアンサンブルが当時オランダに在住の新鋭作曲家和田薫氏に委嘱。篠笛、和太鼓2名、洋楽打楽器4名による東西融合の曲が誕生したのです。他の曲では比較的小となしだった客席が「楽市七座」が終わった瞬間、割れるような拍手。

和田さんとのお付き合いの始まりでした。その後ますます才能を発揮され、多方面で独自の世界を展開されています。スタイルは洋風であっても根幹には日本の伝統が強く流れています。

多忙を極める和田さんが、久しぶりに日本音楽集団のステージに立ってくださること、津軽三味線の木乃下真市氏、チェロの菊地知也氏をお誘いくださったことに感謝いたします。元日本音楽集団の仲間細谷一郎、滝田美智子氏らとの共演も楽しみです。そして初めて聴いてくださるお客様らともども、私たちを「喚起」してくださることを期待しています。

日本音楽集団代表 田村拓男

ごあいさつ

本日は、お忙しい中ご来場いただきまして、誠にありがとうございます。

1988年、米国で日本音楽集団と出会い、この20年の足跡を今回〈喚起の時II〉と題し、新旧織り交ぜた作品を日本音楽集団の定期公演で発表できるのは、作曲家として無上の喜びです。

昨今あらゆるシーンで津軽三味線や和太鼓などの邦楽器が多用され、そして学校教育の中でも邦楽器が取り入れられるなど、一般にも邦楽器が再発見される潮流が現れていますが、日本音楽集団のように、流派や伝統を越え、創造的に邦楽界をリードし続ける存在は、今最も貴重で且つ重要な位置にいると云えます。

私は、純音楽の創作の中、そして映像等の付随音楽（所謂劇伴）の中にも多くの邦楽器を取り入れています。それは何より、邦楽器がもつ「一音入魂」の世界が私の音楽の根底に流れているからに他なりません。

いつの頃からか、伝統音楽が堅苦しく難しいという概念の衣を着せられていましたが、今こそ邦楽器は自由に世界を駆け巡り、あらゆる人たちと、あらゆる音楽の創造に向けて再出発しています。

本日の〈喚起の時II〉が、皆様にとって新たな邦楽器の1ページになることを願いつつ、最後までごゆっくりお楽しみください。

和田薫

1. 座興七重 (1989)

笛(能管) ■ 竹井誠 尺八 ■ 渡辺淳 細棹三味線 ■ 杵家七三 琵琶 ■ 首藤久美子
二十絃箏 ■ 三宅礼子 十七絃 ■ 大畠菜穂子 打楽器 ■ 黒坂昇

2. 鹿鳴新響 —2本の尺八とチェロ、打楽器のための— (新作)

尺八 ■ 牝鹿：三橋貴風・牝鹿：加藤秀和 チェロ ■ 菊地知也〈ゲスト〉 打楽器 ■ 細谷一郎〈ゲスト〉

3. 楽市七座 —篠笛、2人の日本打楽器奏者と4人の西洋打楽器奏者のための— (1988)

笛 ■ 竹井誠 邦楽打楽器 ■ I 黒坂昇・II 細谷一郎〈ゲスト〉
洋楽打楽器 ■ I 高橋明邦・II 若月宣宏・III 島村聖香・IV 多田恵子

● 休憩 ●

4. 海流 —木乃下真市 vs 日本音楽集団— (新作)

津軽三味線 ■ 木乃下真市〈ゲスト〉
笛 ■ 西川浩平 尺八 ■ I 加藤秀和・II 阪口夕山・III 原郷隆
琵琶 ■ 田原順子 三味線 ■ 簗田弘大 太棹三味線 ■ 山崎千鶴子
二十絃箏 ■ I 三宅礼子・佐藤里美 II 久本桂子・渡辺正子 十七絃 ■ 宮越圭子・大畠菜穂子
打楽器 ■ 尾崎太一・多田恵子・若月宣宏

5. 3つの映像からの音像三連

「忠臣蔵外伝四谷怪談」「SAMURAI7」「犬夜叉」より (新作)

笛 ■ 越智成人 笙 ■ 真鍋尚之 尺八 ■ I 原郷隆・II 渡辺淳・III 阪口夕山
琵琶 ■ I 首藤久美子・II 久保田晶子 三味線 ■ 穂積大志 太棹三味線 ■ 山崎千鶴子
二十絃箏 ■ I 田村法子・II 久本桂子・III 彦坂恵美 十七絃 ■ 宮越圭子
打楽器 ■ 尾崎太一・黒坂昇・多田恵子

6. 和楽器オーケストラのための三連譚 "熾・幻・舞" (2006)

二十五絃箏 ■ 滝田美智子〈ゲスト〉
笛 ■ 西川浩平 尺八 I ■ 竹井誠・渡辺淳 尺八 II ■ 阪口夕山・中村仁樹 尺八 III ■ 加藤秀和・原郷隆
琵琶 ■ 久保田晶子 三味線 ■ 簗田司郎・守啓伊子
二十絃箏 ■ I 大畠菜穂子・久本桂子 II 久東寿子・彦坂恵美 III 三宅礼子・渡辺正子
十七絃 ■ 宮越圭子・佐藤里美 打楽器 ■ 島村聖香・高橋明邦

日本音楽集団・PRO MUSICA NIPPONIA 第188回定期演奏会

2007年9月14日[金] 午後7:00開演 津田ホール

主催：特定非営利活動法人日本音楽集団 助成：平成19年度文化庁芸術創造活動重点支援事業
協力：株式会社プロフェッショナル・パーカッション



プロフィール

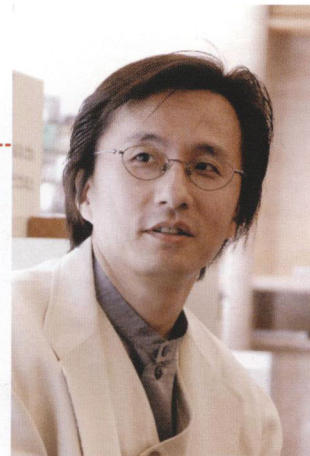
和田 薫 ■ 作曲・指揮・総合プロデュース

山口県下関に生まれる。

伊福部昭に師事。東京音楽大学在学中より、日本交響楽振興財団作曲賞入選や全国吹奏楽コンクールに「吹奏楽のための土俗的舞曲」が課題曲に選ばれる。ニューヨークの国際現代音楽作曲家コンクールに「フルート、ハーブ、打楽器のための相掛」が入選。1986年「オーケストラのための三つの断章」を北オランダフィルハーモニーオーケストラによって初演、熱狂的な成功をおさめる。1988年スウェーデンにおいて「オーケストラのための民舞組曲」が初演され、その後同作品は欧米各国、日本など各国で再演。1990年同作品をグラモフォンBISレーベルで世界同時発売。帰国後は、TVアニメ「犬夜叉」など映画・テレビ・舞台などの音楽を数多く担当。1995年には松竹映画「忠臣蔵外伝四谷怪談」で、日本アカデミー賞音楽賞を受賞。2003年「喚起の時」と題した個展をサントリーホールで日本フィルハーモニー交響楽団と共催し、大盛況を博す。

現代音楽やクラシック、洋の東西を越えた幅広いジャンルでの作編曲およびプロデュースを展開している。

オフィシャル Webサイト：<http://www.kaoru-wada.com/>

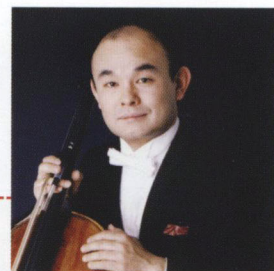


©Ryusei Kojima



木乃下 真市 ■ 津軽三味線

1965年和歌山県出身。10歳より父親から三味線の手ほどきを受け、17歳でNHK邦楽オーディションに津軽三味線で合格。21歳22歳と津軽三味線全国大会で連続優勝。伝統芸能である津軽三味線に現代音楽をいち早く取り入れ、新しいジャンルの邦楽を追求する一方で、正調津軽三味線のテクニクも素晴らしく、ダイナミックで繊細な演奏は感動の域を超える。ロック・ジャズ・クラシックなどもこなし、百年に一人の天才といわれる圧倒的なテクニクを持った津軽三味線奏者。



菊地 知也 ■ チェロ

東京藝大附属音楽高校を経て東京藝術大学音楽学部卒業。第60回日本音楽コンクール第1位、併せて増沢賞、特別賞受賞。第4回日本室内楽コンクール第1位、併せて東京都知事賞受賞。第1回全日本ピバホール・チェロコンクール第1位。霧島国際音楽祭、宮崎国際音楽祭、木曾福島音楽祭、湯布院音楽祭等に参加。現在、紀尾井シンフォニエッタ東京、TOMOカルテット、アンサンブル・ノマド、バロック21等のメンバー、日本フィルハーモニー交響楽団ソロ・チェリスト。東京藝術大学、桐朋学園芸術短期大学非常勤講師。

細谷 一郎 ■ 打楽器

1976年国立音楽大学打楽器科卒。岡田知之氏に師事。邦楽囃子を藤舎華風氏に師事。在学中よりハンガリー交響楽団、NHK交響楽団ほかで様々な経験を積む。岡田知之打楽器合奏団に結成時より参加。多くの初演や、作・編曲を提供する。同合奏団では、1978、80年度文化庁芸術祭優秀賞、1980年度レコードアカデミー賞、音楽の友社賞を受賞。「日本音楽集団」には1984~1993年まで正団員として在籍。他に国立劇場依頼により、和太鼓奏者への指導・作曲の提供や共演がある。外務省派遣等で海外30カ国以上で公演。

滝田 美智子 ■ 二十五絃箏

幼少より箏を野坂恵子師に師事。1976年~1987年、日本音楽集団に在籍。NHK邦楽技能者育成会第22期終了。東京音楽大学卒業。第4回パナムジークフェスティバルコンクール独奏部門第1位受賞。現在迄二十五絃箏リサイタル4回開催。桐朋学園芸術短期大学、国立音楽大学、東京音楽大学の非常勤講師。オーケストラアジア、生田流箏曲社の実会員。現在、ライブ・コンサート等、国内外で活動中。

日本音楽集団 ■

1964年日本の音楽界に新たな動きがありました。それまでの伝統的な邦楽の一線を越え、現代のスピード感、力強さをバネにし誰にでも親しめる新しい邦楽のあり方を求めた一群が誕生したのです。それが「日本音楽集団」です。その音楽と活動は40年の時を経て、現在では年間4回の定期演奏会を中心に、全国各地での公演や、学校での音楽鑑賞会、さらにはCD、放送、映画、演劇等さまざまな分野で演奏活動を行なっています。またこれまでにヨーロッパ、アメリカ、旧ソ連、中国、東南アジア、オーストラリア等、世界31カ国151におよぶ都市で公演を行ない、その中でアイザック・スターン、ヨーヨー・マやグヴァント・ハウス・オーケストラ、ニューヨーク・フィルとの共演を実現し、今までの邦楽とは一線を画した「日本音楽集団」に海外でも高い評価を得ています。これらの活動に対して1967年芸術祭奨励賞、1970年芸術祭大賞、1971年芸術祭優秀賞、1978年第2回音楽之友社賞、レミー・マタン音楽賞、1988年松尾芸能賞特別賞、1990年モービル音楽賞をそれぞれ受賞しています。日本音楽集団の音楽、それは現代邦楽に新たな可能性を求め、その活力を21世紀に伝えるものです。



座興七重

1989

この作品は、日本音楽集団創立25周年記念の委嘱として作曲されました。

笛、尺八、琵琶、三味線、二十絃箏、十七絃箏、打楽器の七人のための編成で、それぞれに固有の世界観をもつ伝統楽器が「座興＝遊び」の中で、幽玄・粋・祭りなどの感覚を織り成していくよう試みた作品です。

"楽しめる現代音楽" という、ある意味二律背反するこの命題は、音楽の本質を失いつつあった現代音楽の現状に放った挑戦状のようなものでもありました。約二十年前のその試みが、今日どう映るか作曲家自身、楽しみなところですよ。

初演当時のメンバーを含む演奏者の遊び心をご堪能ください。

鹿鳴新響

二本の尺八とチェロ、打楽器のための

2007/初演

この作品は、尺八の古典本曲の名曲「鹿の遠音」を素材に、今回のコンサートのために書き下ろした新作です。

現在、邦楽器は楽器の改良と奏者の技術向上により、ピアノやフルートの如く西洋音楽を表現できますが、そこには本来伝統楽器が持つ本質的な "味" が失われていくように感じられます。やはり伝統の中にある楽器の "味" を活かすには、伝統音楽をどのように現代に料理するかを問い直さなければならぬと思案を試みたのが、この「鹿鳴新響」です。

〈文化と歴史の全く違う二つの世界の音楽が共存できるのか?〉

この命題を解くために「鹿の遠音」を選んだのは、この曲が尺八古典曲の中で最も知られている曲だということだけでなく、20年前に米国で初めて聴いた音楽集団の演奏がこの曲だったということに深く由来しています。日本の伝統音楽を初めて聴いたアメリカ人の反応はとて直情的で感動的なものでした。伝統を現代に活かす鍵がここにあるのではないかと、と当時からずっと私の心の中に深く内在していたのです。

この作品は、今日のコンサートの演目の中でも特異な位置にあるでしょう。それは、作曲家としての新たな試みのはじまりであり、ひとつの結論でもあるからです。

この作品を創作するにあたって演奏者の三橋貴風氏と加藤秀和氏の両氏に多大なるご協力を頂いたことに、この場をお借りして感謝いたします。

楽市七座

篠笛、2人の日本打楽器奏者と4人の西洋打楽器奏者のための
1988

この作品は、1988年にアメリカのミシガン大学音楽協会の委嘱により作曲され、同年、日本音楽集団のアメリカ公演の一環として、ミシガン・パーカッション・アンサンブルとの共演でミシガンにおいて初演されました。曲は、5つの部分により構成されています。

当時、私はヨーロッパに滞在していたのですが、同アンサンブルの主宰者で親友でもあるマイケル・ユドー氏から、今度日本から来るグループのために共演できる作品を書いてくれないか、と話をいただきました。実は、これが邦楽器を含んだ最初の作品を書くきっかけとなり、そして日本音楽集団とも出会う機会となったのでした。

この曲は、日本の表現方法における「ノリ」と西洋との融合・共鳴を試みた作品ですが、米国初演から20年、日本のあらゆる団体のみならず、台湾やドイツなど、日本国外でも多く演奏され、各国それぞれの「ノリ」で表現しています。それは作曲家として大きな喜びであり、日本の「ノリ」が「nori」になる楽しさでもあります。

今日は、全パート日本人による生粋の「ノリ」でお楽しみください。

海流

木乃下真市 vs 日本音楽集団

2007/初演

日本を代表する津軽三味線奏者・木乃下真市氏は、優れた作曲家としての一面もあります。今日演奏する「海流」をはじめ多くの作品を発表されていますが、そのどれもが日本の詩情と魂をストレートに表現した佳作揃いです。

私と木乃下氏との出会いは、1997年和太鼓の林英哲氏のアルバム制作のレコーディングが最初でした。その卓越した技術と表現力は、作曲家として大いに刺激を受け、それは2003年の〈喚起の時〉で初演した津軽三味線とオーケストラとの協奏曲「絃魂」へと実を結びました。

木乃下氏は、「海流」について「太古の昔から、海は潮の流れにのせて多くの文物を運んできた。(中略) 地方地方に伝わる唄も、舟に乗り海流に運ばれて各地に伝わっていったことだろう。」と語っています。海流という何億年と変わることのない流れの中で、唄という民族の魂の伝承が、この曲に込められていると云えます。「津軽あいや節」をモチーフにし、独創的で迫力ある三味線の器楽曲に昇華した様子は、まさに木乃下節と云えます。

今回、その木乃下氏をスペシャルゲストに迎え、日本音楽集団との邦楽器バトルを展開します。二つの個性がぶつかり合い、どのような激流が生まれるか楽しみなところですよ。

3つの映像からの 音像三連

「忠臣蔵外伝四谷怪談」「SAMURAI7」「犬夜叉」

2007 / 初演

この作品は、私が担当した映像作品の中から、邦楽器を多用した3作品を選び、そのテーマやモチーフを使用し一つの音楽作品として作曲しました。

深作欣二監督の「忠臣蔵外伝四谷怪談」は、監督の作品の中でも特に荒唐無稽な映画だと言えます。現代音楽と邦楽とロックを融合した音楽、それが監督のリクエストだったので、その独特の美意識と邦楽とが相まって、かなりユニークな作品となりました。

「SAMURAI7」は、黒澤明監督の「七人の侍」を原案にした近未来アクションアニメです。この作品は、和太鼓の林英哲氏と共同プロデュースをし、和太鼓をフルに活用した音楽となっています。

「犬夜叉」はご存知の方も多いテレビアニメで、この音楽で邦楽器を好きになった小中学生も多く、私のアニメ作品の中でも最も多く邦楽器を取り入れた作品です。

日常的に邦楽器を聴くことが少なくなった現在、こうした映像作品の中で邦楽器の音に触れるのは、むしろ潜在的な文化ルーツを呼び起こすのに効果的ではないかと考えます。そして、映像と音楽とが共鳴する作品は、純音楽とはまた違ったイマジネーションの世界へと誘うでしょう。

今回は、各方面のご協力のもと、照明に映像を加えた演出もお楽しみください。

和楽器オーケストラのための
三連譚 "熾・幻・舞"

2006

この作品は、2006年ブライトワンの委嘱で、和楽器オーケストラ "あいおい" によって初演された作品です。

それまで、劇伴などでの邦楽器の使用やアンサンブル作品の作曲など、邦楽器のための作品は少なくないのですが、オーケストラ的な大編成の作品はありませんでした。それは、「鹿鳴新響」のコメントでも述べましたが、邦楽本来の "味" を大編成で表現できるのかが、大きな課題でした。

邦楽器ならではの編成。それは決して欧米のオーケストラのシュミレーションではなく、独自の創造としての集合体。それをこの作品で試みました。

曲は、タイトルのとおり3つの曲から構成され、それぞれは深くつながりを持っています。1曲目 "熾 (おきび)" は、熱く赤くおこった炭火のような情熱を表現しています。それは初演者である "あいおい" の和楽オーケストラへの熱い思いへの共感でもありました。2曲目の "幻" は、笛・尺八・琵琶・三味線・二十五絃箏の五重奏を中心に、邦楽ならではの音世界を展開していきます。3曲目の "舞" は、6拍子・7拍子・6拍子等目まぐるしく変わる拍子の中、全楽器が群となって舞っていきます。和楽器をオーケストラとして最大限表現し、興奮と激情を持って終結します。

座談会

和田薫と日本音楽集団

— さまざまな化学変化を期待する —

出席者：和田薫・田村拓男・越智成人 / 文章：福嶋頼秀

日本音楽集団との出会い

(田村) それではまず、和田さんに日本音楽集団との出会いの印象をお話していただきましょう。

(和田) 1987年にミシガン大学から、和楽器と洋楽打楽器のための作品の作曲依頼の話がきたんです。何でも「日本から、五線譜の読めるお囃子グループが来る」という。詳しく聞いてみると、日本音楽集団のことだった(笑)。

僕は東京音楽大学で学んでいたんで、そこで教えている三木先生や野坂恵子さんの活動をはじめ、日本音楽集団のことももちろん知っていました。

(田村) そうして出来上がったのが『楽市七座』ですね！1988年のアメリカ3カ所での公演、そして朝日生命ホールで行われた凱旋公演と、大成功でした。



邦楽器を特別なものにしたくない

(田村) その後の和田さんのご活躍は、邦楽器だけでなくオーケストラや映画音楽の分野とめざましいですね。そんな中で和田さんは、映像音楽の中で邦楽器を効果的に使っています。

(和田) 僕は邦楽器というものを「コンサートでなければ聴けない、特別なもの」にしたくないんです。テレビからきこえてくる音楽で使われていて、自然となじんでしまうような形もあると思うんです。僕は『ゲゲゲの鬼太郎』『犬夜叉』といったアニメの音楽の中で邦楽器をたくさん使っています。日本音楽集団のメンバーも、何人も録音に参加してもらっているんですよ。

おもしろいことに、そういったアニメを見た子供達の中で、笛や太鼓をはじめの人がたくさんいるんです。これは、彼らが邦楽器や日本の音階というものを、自分に近いものとして自然に受け入れているんだと思います。これは日本人誰もが潜在的に持っている感覚…いわばDNAに、自然に働きかけているのでしょう。

鹿鳴新響について

(田村) なるほど。そういう意味では和田さんの音楽は、現代音楽の作曲技法のある時期の主流であった十二音技法とは異なりますね。

(和田) 十二音技法は、ヨーロッパで作曲技法が展開してゆくなかで、必然的に生まれたものだと思います。簡単に言うと「1オクターブの中の12個の音を、平等に使う」作曲方法なのですが、ひょっとするとこれは日本人の美意識とは関係ないものなのではないでしょうか。

例えば祭囃子のような日本の音楽のフレーズは、五音音階を使っていますが、私達は祭囃子がきこえてくるとわくわくする。

我々が現代音楽を作曲するのにあたり、「十二音技法を用いるのか、それとも日本の音階を用いるのか」という選択肢からスタートすべきでないかと思うんです。

(田村) そうですね。そこで今回のプログラムの注目作品の一つ、新作の『鹿鳴新響』ですが、これはその2つの文化を組み合わせていますね！

(和田) そうなんです。僕はこの曲で、5音文化と12音文化が組み合わさることによって生じる"化学変化"を、ねらっているんです。尺八群は古典の『鹿の遠音』を通し5音文化的な世界観を表現する。チェロはヨーロッパ的な音楽を象徴し、そのあいだの空間にいわば無国籍なものとして打楽器が存在する…。

(田村) それはとてもおもしろそうですね！

研究会から要望が… これからの邦楽への期待

(田村) とここで今回の定期演奏会を和田さんにプロデュースしてもらうことになった経緯を、越智さん、話してもらえますか。

(越智) はい。私たちは、若手メンバーを中心とした「研究会」を作り、定期的にいろいろな作品を試演したり、成果発表のコンサートを行ったりしています。和田さんの作品も取り上げているのですが、そういった人達の中で「定期演奏会を、和田さんにプロデュースしてもらいたい！」という意見がたくさんあったんです。

(和田) それはたいへん嬉しいですね。

(田村) 今、日本音楽集団では、古典・現代邦楽から編曲ものまで幅広い種類の作品を演奏しています。かつては邦楽合奏曲の普及などを目的とし北軽井沢で「夏のアカデミー」(1971~1984年)を続けて開いていましたが、去年からその復活を試みることにし、同時に新作の発表・出版も行っています。そういう雰囲気の中で、作曲家の役割はますます重要になってきます。今度は、和田さんと日本音楽集団との間の"化学変化"を期待したいですねえ。

(和田) はい。若手邦楽器奏者の活躍や、教育現場での邦楽器の導入といった機運の中、邦楽器のレパートリーを増やしてゆくことはとても大切です。邦楽オーケストラ的な発想の合奏曲だけでなく、ソリスティックなアンサンブル曲なども必要でしょう。また、洋楽器や、他の民族楽器とコラボレートしてみたり…。そういった中でたくさんの"化学変化"を、今後の日本音楽集団に期待します！

企画・プロデュース：和田 薫

座談会文責：福嶋 頼秀

協力：藤田 崇文

照明：中川 健二

映像協力：松竹株式会社／ゴソゾ／讀売テレビ／読売テレビエンタープライズ／
小学館プロダクション／サンライズ

録音：山田 正弘

舞台監督：中島 隆

楽譜協力：東京ハッスルコピー／小林 正二

デザイン：原田 和香

楽器協力：プロフェッショナル・パーカッション 舞台協力：IMS / 琴光堂 / 津田ホール

写真協力：小島 竜生

制作：日本音楽集団

特定非営利活動法人日本音楽集団

〒151-0073 東京都渋谷区笹塚3-17-1 滝沢ビル302号

Tel : 03-3378-4741 Fax : 03-3376-2033

URL : <http://www.promusica.or.jp/> E-mail : office@promusica.or.jp

■ 賛助会員へのお誘い

1999年10月、特定非営利活動法人日本音楽集団発足を契機に賛助会員を募集しています。是非、多くの方々からご支援を仰ぎ、息の長い活動を目指し、ご協力をお願い申し上げます。

■ ニッポニア・ファイブ募集中

連続5回の定期演奏会がお得な料金でフリーパスになる他、数々の特典があります。

- ニッポニアAファイブ＝前売り定価5,000円のA指定席を5回連続15,000円
- ニッポニアBファイブ＝前売り定価4,000円のB指定席を5回連続12,000円

以上詳細は日本音楽集団事務局までお問い合わせ下さい。

賛助会員

法人

(株)全音楽譜出版社
(株)宮本卯之助商店
NPOトリトン・アーツ・ネットワーク

個人

青柳 堯 五輔 子山 子緑 枝衣
安達 眞 克 絹 正 厚 富 颯
新井 塚 正 幸 繁 雄 士 見 弘
飯塚 吉 厚 厚 正 恵 雅
伊藤 美 恵 厚 厚 正 恵 雅
今村 西 厚 厚 正 恵 雅
江大 関 富 厚 厚 正 恵 雅
太田 田 颯 厚 厚 正 恵 雅

大塚 悦 子
川壁 彰 正 則 子 憲 幸 繁 雄 士 見 弘
岸藤 陽 正 則 子 憲 幸 繁 雄 士 見 弘
後藤 田 和 厚 厚 正 恵 雅
桜反 田 和 厚 厚 正 恵 雅
四反 田 和 厚 厚 正 恵 雅
杉田 野 井 山
関野 井 山
棚土 藤

中島 靖 子
濱田 川 羽 衣
古川 羽 衣
本野 正 徳 子
水宮 川 慶 子
渡辺 京 子
渡辺 邦 子
渡辺 治 子
Andrew MacGregor

協力会員 (五十音順)

名誉団員

坂井 敏 子
白根 きぬ 子
野坂 恵 子
宮本 幸 子

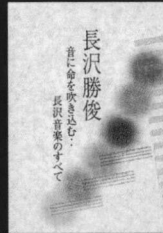
地方支部

道東支部 谷 藤 彌
道東支部 竹 馬 巨
水戸支部 斎 藤 幸
山梨支部 郷 幸 宇
長野支部 佐 藤 幸 宇
新潟支部 飯 吉 正 山
愛知支部 山 田 孝 子
愛媛支部 渡 辺 治 子
福岡支部 安 武 由 香 理
熊本支部 古 川 安 春

2007年4月現在

長沢勝俊

音に命を吹き込む・
長沢音楽のすべて



日本音楽集団の西川浩平、水川寿也、宮越圭子の対話者が、“長沢ブジ”の魅力を訪ね、長沢勝俊の音楽人生について語る。

長沢と共に歩んだ方々の貴重なメッセージを収録。また、作品年表も掲載。 A5判 定価700円

粋に愉しむ

株式会社 琴光堂

〒152-0003 東京都目黒区碑文谷2-19-15

TEL 03(3792)8481 FAX 03(3792) 8437

E-mail : tokyo@kinko-do.com